

コミュニケーション活動を軸とし、

児童が主体的に学ぶ外国語教育について  
—教育課程特例校としての実践と研究を通して—

兵庫県 神戸市立井吹東小学校  
校長 小橋 幸代

## 1. はじめに

本校は神戸市西区の西神南ニュータウン（井吹台地区）にある児童数1100名を超える大規模校である。井吹台地区には1中学校3小学校があり、平成26年度より神戸市の「小中一貫カリキュラム教科拠点地区事業 外国語教育拠点校」に指定され、1中3小が連携しながら、英語の教科化や早期化に対応した小中一貫カリキュラムの作成等の研究実践をすすめてきた。

更に平成28年度より3小学校は、文部科学省教育課程特例校（外国語教育）認定を受け、1年生から6年生まで、通常の教育課程の編成を変更し、英語教育の時間を通常より多く実践し、研究をすすめることとなった。井吹台地区1中3小は、まだ補助教材等がない時期から6年間にわたり、カリキュラムや教材等で連携しながら、それぞれの学校の特色を生かして研究と実践を続け、神戸市の外国語教育でのパイロット地区としての役割を果たしてきた。

### 【平成28年度～令和元年度までの時数】

- 1・2年生・・・年間10時間の外国語活動
- 3・4年生・・・年間35時間の外国語活動
- 5・6年生・・・年間70時間の外国語活動  
(外国語科も視野に入れて)

本校が目指す外国語教育は、誰とでも仲良く、共に生きることができる人を育てることである。そのために、「英語」をコミュニケーションの一つのツールとして捉え、それを通して人とつながることや人と分かり合うことの楽しさや大切さを味わせたり学ばせたりしたいと願いながら、コミュニケーション活動を中心にした外国語活動に取り組んできた。

以下、コミュニケーション活動を軸とし、児童が主体的に伝えたいことを伝え合う外国語や外国語活動の授業づくりについて、これまでの本校の取組の一端を述べてみたい。

## 2. 本校の特色ある取組について

### (1) 常駐するALTの活用

平成27年9月より、常駐のALTが配置された。これにより、児童が日常的にALTを通して、英語や外国の文化にふれることができる環境になった。児童は外国語活動の時間はもちろんのこと、ふだんの休み時間や給食時間などでも、ALTと遊んだり会話をしたりすることが日常となった。また、担任・担当とALTとの打合せの時間も充実したものとなり、単元を計画するときにも、ALTの存在を生かしたものにすることができるようになった。

### (2) 低学年からの外国語活動

小学校1・2年生は、英語という言葉や外国の文化に最初にふれる大切な時期である。何事にも興味を示し、生き生きと活動するその特性を生かして、体で表現する楽しさを感じ、耳でネイティブの生の音を聞き、それを真似するという活動を中心に、年間10時間程度の実践を行った。ALTや担任と一緒に、歌やダンス、ゲーム、あいさつ、友達との簡単なコミュニケーション活動などで、簡単な英語の表現にふれ、「英語って楽しいな」「伝わるってうれしいな」ということを体感する機会を多く取った。ALTが常駐しているという利点を生かし、ALTとのふれあいの機会をできるだけ多くもてるようにと、45分間の授業を15分単位の3回（ショートタイムレッスン）に分けて、「15分×3回と45分×1回」を1セット（2単位時間）とする単元構成で授業に取り組んだ。ショートタイムレッスンで慣れ親しんだ英語表現を使って、最後には自信をもって、友達や先生、ALTに自分が伝えたいことを伝えるコミュニケーション活動を展開することができた。



小学校3・4年生は、低学年での経験を生かし、自分の本当のことを伝えながら、コミュニケーションの楽しさを体感するような活動を行った。文科省補助教材「Let's Try!」が導入されるまでは、本校独自のカリキュラムを作成し、移行期間以後は「Let's Try!」を軸にした外国語活動を実践してきた。世界のいろいろな国のあいさつを知る活動から始まり、“Do you like~?”や“What~do you like?”などのコミュニケーションをすすめる上で必要な表現に慣れ親しんだり、ALTを通して外国の文化などを知ったりする活動に取り組んだ。また、総合的な学習の時間の単元や学活などと関連付けることも行った。

### (3) 教科横断的な取組や他学年との関わり

本校の外国語活動では、担任・担当とALTとの協同授業が基本である。その特徴を生かして、本校では、他教



科や他学年との関連にも数多く取り組んできた。総合的な学習の時間、図工、音楽、国語、算数など、あらゆる教科領域に関連付けて単元を組むことができる。例えば、5年家庭科の「味噌汁を作ろう」と外国語活動「What would you like?」を関連させて、授業を行った。家庭科で学習した栄養素をもとに、児童がALTに健康に良いおすすめ味の味噌汁の具材を紹介する内容であった。また、4年の「二分の一成人式」では、3・4年の外国語活動で慣れ親しんだ表現を使って、自分の成長を伝える活動を取り入れた。このように、単元の構成の工夫次第で活動の可能性は幅広い。

他学年との関わりも同様である。相手意識をしっかりもたせることを目的として、他学年との関わりをつくるのが大切なこととなる。例えば、6年生が1年生に昔話の英語劇を見せる活動などは、6年生が1年生にでもわかるような英語の表現や動作を使って、楽しい劇を発表した。どち



らの学年にとってもメリットのある取組であった。

### (4) スピーキング・チャレンジ

小中一貫した児童生徒の「英語活用力」を検証するために、平成28年度より実施している。ALTと児童が1対1で会話する中で、授業で慣れ親しんだ英語表現を活用する力を評価するものである。小学5年生から中学3年生まで、一貫した指標を作り、5年間を通して、その児童がどのような力を身に付けたのかという視点でも、評価することができるになっている。既習事項を生かしていかに会話することができるかを見取るものであるが、児童にとっては、ALTと二人だけで会話をやるチャンスが生まれ、褒められることで自信につながっている。外国語科での評価方法の一つとしても、たいへん有効なものだと思える。

### (5) イングリッシュ・デイ・キャンプ in Kande

教室での授業以外で、英語の世界にどっぷり浸かる体験を多くの児童にさせたいという思いから、神戸市在籍の約20名のALTの協力を得て、5年生全員が参加する学校行事である。神戸市西区郊外の神出自然教育園を英語村に見立て、その日一日は、英語圏の国に旅行に行ったような場を設定し、ALTと共に楽しく過ごし活動した。

入国審査、ALTとの交流、数種類のアクティビティ、昼食など様々な場面でALTと関わり合い、自然の中での活動を通して、必然的に英語でコミュニケーションを取らなければならない状況を設定した。児童

は同じグループの友達と助け合いながら、自分が使える簡単な英語やジェスチャー



などで、自分の伝えたいことを伝えるという体験をすることができた。10時間ほどの大きな単元として、5年生の教育課程内に位置付けたことで、準備から当日、そしてまとめまで、体系的な学習活動となったことは意義が大きい。

児童の事後アンケートでも、「自分の英語が伝わってうれしかった」「もっと英語を話したいと思った」「これからの外国語活動がより楽しみになった」など、意欲的な感想を多く見ることができた。本校では、学校を離れてイングリッシュ・

デイ・キャンプを行っているが、この取組は、形式を変えれば通常の学校内でも実施可能な取組



である。児童が楽しんで英語でコミュニケーションできる場の設定例としては、大変有意義な活動と言えるだろう。

<b>旅券 Passport</b> 井吹東小学校 Ibuki Higashi Elementary School 個人番号 My Number Class No. 姓 Surname 名 Given name 性別 M / F 生年月日 Date of birth	<b>Schedule</b> 8:45 → 9:10 KANDE 9:45 Opening Ceremony 11:30 芝生広場完了 11:35 Photo Time 11:50 Lunch Time!! 12:40 芝生広場 12:45 - 13:35 トレジャーゲーム 13:50 ホールに集合 14:15 Good bye 14:30 おわりの式
	<b>Things to bring (持ち物リスト)</b> <input type="checkbox"/> バスポート (しおり) <input type="checkbox"/> 名札 (英語用) <input type="checkbox"/> 筆記用具 <input type="checkbox"/> ティッシュ <input type="checkbox"/> ハンカチ <input type="checkbox"/> お弁当 <input type="checkbox"/> 汗ふきタオル <input type="checkbox"/> 水とう <input type="checkbox"/> おやつ (食べられる量) <input type="checkbox"/> レジャーシート <input type="checkbox"/> 雨具 (かさ・カッパ) <input type="checkbox"/> 赤白帽 <input type="checkbox"/> スーパーのふくろ (2~3枚)

## (6) 中学校との連携

高学年で外国語科が導入され、中学校では、小学校高学年との接続ということが、ますます大きな課題となってきている。中学校英語教員が、小学校での外国語活動や外国語科の実践を知り、中学校での授業に生かすことができれば、小中連携の意義ができてくると考えられる。

そこで、これまで井吹台地区1中3小では、学期毎に英語担当者会を実施して、共通のカリキュラムや教材を作成したり、中学校英語教員による出前授業を行ったり、協同で授業研究会を開催したりして連携を深めてきた。共同で開発した教材一つとしては、昨年度まで使用していた6年生の「We can!2」の最後の単元である「Junior High School Life」に関連付けた教材がある。来春入学してお世話になる予定の中学校の先生・教室や施設・部活動などを、中学1年生が簡単な英語を使って案内するというDVDを作成し、3校に配布し、授業で活用した。DVDに登場するのは、1年前まで同じ小学校で過ごした身近な先輩たちなので、視聴する6年生にとっては、「中学生になったら、こんなに英語を使えるようになるのか」「中学校は楽しそうだな」などといったような憧れや期待感をもつことができる。また、3小学校

の単元計画を同じものにするだけで、一つの中学校に入学してくる生徒全員が、6年生の時に単元の導入として同じDVDを視聴し、学習を進めたというメリットがあった。本年度より、外国語科として教科書を使用しているが、同様の単元があるので、学びの連続性を図るといった観点からも、今後も中学校に接続できるDVD等の教材を共同で開発して、活用していきたいと考えている。

## 3. 昨年度の授業実践から

コミュニケーション活動を軸として、児童が主体的に学ぶ外国語活動を実現するための重要なポイントの一つに、単元を組み立てる上で「単元の出口」の設定を明確にすることが挙げられる。児童が本当に伝えたいことや聞きたいことを伝える場面設定を考え、そこからその単元の導入を構築していく。また、児童の伝えたいという意欲を高めるためには、コミュニケーションを円滑に行うことができる最低限のスキルを身に付けさせることも大切である。

### (1) Small Talkの活用

新学習指導要領の外国語科の指導においては、言語材料の定着にも重点が置かれている。児童が現在学習している単元及び既習の単元で学習した言語材料を、繰り返して活用できる機会を保障し、その言語材料のより一層の定着を目指すことが求められている。また、「話すこと」によるコミュニケーションを行う際に欠かせないことが、「対話を続けるための基本的な表現」である。私たちが日本語で対話をする際も、相手の話した言葉を繰り返して話し手が伝えたい内容を確認めたり、相手の話したことに何らかの反応を示したりすることで、対話は続くものである。これは外国語であっても同じことが言える。

本校では、Small Talkを行う際に、誰かになり切って話したり、役を演じたりするのではなく、指導者や児童が自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどについて真の会話でやり取りする授業を目指し実践してきた。従来の外国語活動で児童に提示してきた「Good gesture」「Clear voice」「Smile」



「Eye contact」に、「Response」を新たに加えて、「Wow!」「Really?」「Me too.」などの言葉が会話の中で自然に出てくるような授業展開を目指した。

(2) 5年「大切な人や憧れの人を紹介し合おう」  
(We Can!Unit9 Who is your hero?)

昨年度の5年生は、毎時間、Small Talkを通して本時に関する気付きの共有や、既習内容のアウトプット、本時末に必ず行う振り返りタイムを通して本時の学びの共有を行い、ただインプットするだけでなく、主体的に学び、気付きを次の学習へとつなげる取組を行ってきた。

この単元は、5年生の総仕上げとして位置付けられ、自分の憧れの人や大切な人を題材としている。指導に当たっては、まず単元の入口やゴールの設定(出口)の場面を大切にしていって。第1時では、既習の三人称や“can”の想起につなげていくために、Unit5で行ったキャラクタークイズを再度用いて児童が思い出しやすいようにした。キャラクタークイズの後には、学校の教員が題材になった「誰でしょうクイズ」を行った。児童と“Can you～?”や“Yes, I can./ No, I can't.”のやり取りを、クイズを通して行うことで、自然と“can”の表現に親しむことができるようにした。第2時以降には、“be good at”の表現にも出会う。“can”の後には動詞の原型、“be good at”の後には動名詞(名詞)が続くが、この内容は小学生にとっては非常に難しいものである。そこで、かるたゲームを毎時間行い、その中で音声をもとに、違いについての気付きを共有し、少しずつ児童に浸透していくようにした。“can”の絵カードとその後続く動詞の絵カードの背景色を同じにし、“be good at”とその後続く動名詞(名詞)の絵カードの背景色を、“can”の絵カードとは別の背景色にすることで、児童の気付きが生まれやすいように工夫した。単元の出口については、敢えて第4時にふれるようにした。本校の玄関には、プログラム委員会児童が作成した「学校の先生紹介



コーナー」があり、その中に「憧れの人」という項目がある。児童はこれをよく見ており、

「今度はみんなの憧れの人や大切な人を知りたいな」という切り口のもと、児童と共に単元のゴールを設定していくようにした。

本単元の学習計画は、学習の展開が全て本当のことに基づいており、その結果、単元を通して、相手意識を常にもち、相手との会話のキャッチボールを意識したコミュニケーション活動を展開することができた。教師と児童間では、会話のキャッチボールをすることはたやすいが、児童同士のコミュニケーションとなると、反応も一定のものになりがちで、準備した文を「ただ伝えるだけ」の一方通行的なやりとりになりがちである。そこで、自分自身が伝えたいことを伝えるだけでなく、話し手が聞き手に、話題に関する簡単な質問をしたり、聞き手が相槌を打ちながら話題に関する追加の質問を話し手にしたりする場面を多く作り、児童が主体的に学ぼうとする場をもつことができたと感じている。

第5時

①Small Talk (先生方の★My hero★紹介) ⇒ 紹介の見本であり、本時のめあて(目指す姿)の確認



②Activity 1

親しもう①  
Let's Chant  
音に親しもう  
かるたゲーム  
ストーリーゲーム

ストーリーゲーム  
第5時より実施。  
人物カードを引く。  
3人で協力しながら考える。

「音に親しもう」も、年間を通して行っている。第5学年の1年間で、アルファベットの音を学ぶことが出来る。

即興的に考えることがねらい。色カードから選ぶことができるようにしている。

① This is Mr. Nakane.  
② He can play basketball.  
③ He is good at...

③Activity 2

親しもう②  
書く活動  
コミュニケーション活動

She can cook.  
She is good at playing basketball.

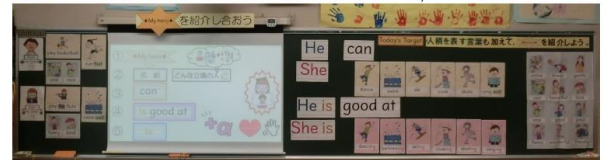
第5時では、★My hero★のできることや得意なことを友達に伝える。

プレゼンテーションソフト内には、色付け (can 黄色・good at ピンク・形容詞 水色) をし、児童の視覚的支援となるようにしている。

④Today's UPI!!!

「水色カードの言葉を少し書えるようになった。」の声が多かった。⇒形容詞に関しては、第4時の時点で、知りたい欲が高まっている。

第5時の黒板掲示(写真は、第6時予定のもの) 「めあて」のみが違う(第5時のめあては、★My hero★を紹介しよう)



4. おわりに

本年度より本格的に外国語科がスタートした。これまで本校が大切にしてきた「本当のことを伝える」コミュニケーション活動を継承しながら、児童が主体的に学ぶ新しい外国語教育を、さらに研究・実践していきたいと考えている。